慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小特集 : ヴィレフレード・ パレート『経済学提要』刊行100年
Sub Title	序 Preface
Author	池田, 幸弘(Ikeda, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2007
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.4 (2007. 1) ,p.607(1)- 608(2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 : ヴィレフレード・ パレート『経済学提要』刊行100年
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20070101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」99 巻 4 号（2007 年 1 月）

小特集：ヴィレフレード・パレート『経済学提要』刊行100年

本誌では，ときおり経済学の古典刊行や，著名経済学者の生年，没年を記念して，特集を編んでいる。2006 年は，現代経済学の展開にさいして重要な役割を果たしたヴィレフレード・パレートの『経済学提要』（Manuale di Economia Politica con una Introduzione alla Scienza Sociale）の公刊百年にあたっているので，これを記念して小さい特集を企画することとした。

『経済学提要』を記念する会は川俣論文でも言及されているようにイタリアで開催されたようだし，管見の限りでも，オーストラリアのパレート研究者，マイケル・マクルアが「今日から百年前」（Michael McLure, "One Hundred Years From Today, Vilfredo Pareto. Manuale di Economia Politica con una Introduzione alla Scienza Sociale. Milan: Società Editrice Libreria. 1906." In: *History of Economics Review*, No. 44, Summer 2006）と題したエッセイで同著の刊行を記念している。本誌の特集もこれらの企画にならい，パレートの諸業績を称えまた同時に批判的に検討しようというものである。

今回，寄稿されたのは，福岡正夫，須田伸一，そして川俣雅弘の三氏である。冒頭にあたり，読者の便宜のために簡単に各氏の論考を要約しておくことにしたい。

福岡論文は，まずはパレートの伝記から稿をおこし，続いて彼の理論的貢献について考察を加える。扱われるトピックスは，パレート法則，効用の可測性，積分可能性条件，要素間の代替可能性の議論，そして厚生経済学の基本定理ときわめて多岐に及んでいる。最後にパレートの社会学の著書，『一般社会学概論』に及び稿を閉じている。関心を持たれる読者は福岡正夫『歴史のなかの経済学』（創文社）に含まれる他の経済学者についての諸論考をあわせて読まれると，教授の経済理論史についての総体像がさらに身近に感じられることと思う。

これに対して，あまたある論点のなかで，とくに積分可能性条件を主題としたのが，次の須田論文である。通常，積分可能性条件を消費の順序と同一視したのは，端的にパレートの誤謬とされてきたが，須田論文はむしろある点からパレートの論述を擁護する。つまり，基数的効用を考えた場合には，消費の順序と積分可能性条件との関係をリンクさせて考えたのは自然だったと主張する。

川俣論文でも，序数主義，完全分配定理，新厚生経済学など多くの論点が問題とされている。川俣

はとくにパレートの立場を「帰結主義的序数主義」と呼び，これを著者自身の見地から過去のSRP（Scientific Research Programme）と呼んでいる。三論文のなかでは，パレートを源とする厚生経済学にたいしては批判的であり，なんらかの個人間効用比較が必要だと述べるに至っている。

これらの諸論考を事前に拝読する機会に恵まれ，エンジニア的数理経済学者でもあり，また社会学についても大きな業績を残したパレートは，平凡な形容ではあるがやはり巨人であるとの印象をいまさらのように深くした。改めて，御多忙のなか寄稿に御協力いただいた方々にたいして感謝したい。今回は期せずして，経済理論家としてのパレートに光を投げかけた特集となったが，経済理論にとどまらず，さらに社会学などを含めた全業績についてパレート研究が進展することを祈念して止まない。

池　田　幸　弘
（経済学部教授）